

～11月3日（土）1日目リレー小説～

「ねえねえ、人間の恋愛感情って3年しか続かないんだって。」
ただの独り言を聞いている人など誰もいないという事実気づき、僕は1人で笑ってしまった。

一頻り笑ったあと、僕は徐に本を開いた。

それは1週間前、友人におしつけるようにわたされたもので、少し不格好な小鳥の葉がはさまっている。

これまで葉は、何百何千と使ってきただろうか？

今日は、お気に入りの1枚を持ってきた。明日は、どれにしようか。

いくつもの葉を見てきたが、その本にはさまっていた、小鳥をかたどった葉にはある特徴があった。

小さな手書きの文字で、何やらびっしりと書きこまれていたのだ。

ずいぶん使い込まれているのだろう。字がかすれたりしていて読みにくかったり日焼けしていたが、最初に書かれているのが『愛しい貴方へ』だったのだけは読みとれた。

たった2回の逢瀬に思い出せる限りの言葉を、やりとりを書き留めた。

その葉は鳥の形を体現するように手元を離れた。

「じゃあ、この感情は、一体なんなんだろうね。」

僕の戯言は、白い息となって虚空へと消えてゆく。

ふいに吹いた風に、ひざの上で開いていた本のページがパラパラとめくれた。

「考えていても仕方ないよ。」

僕1人しかいないはずの部屋に、どこからか声が聞こえた。

びっくりして窓の方を見ると、お隣さんの猫が仕切り板を破って我が家のベランダに侵入したところだった。

「にゃー」

ずいぶん、かわいらしく鳴いているが、その仕切り板は非常時に破るものだ。

簡単に破れるものではない。

これは本当に猫なのだろうか。謎である。

いや、実は俺だった……。

鏡のような、窓にうつった自分の姿を自分ではないと思いこんでいたのだ。

窓にうつる自分の姿を見て、僕は言葉を失った。

「にゃんだ、これは……」

そうつぶやいたとたん猫（僕）は顔を歪めた。

「僕よりも猫らしい事を言うな。許さん。」

よく磨かれた爪が火を吹いた。

「え……??」

目の前で起こったことが信じられず、猫(僕)は火を吹く爪で自分のシッポを燃やしてみた。

「燃えるだろ？」

隣家から侵入してきた猫は言った。

「燃えますねえ、やっぱり。」

僕は答えた。

「恋とはその炎のようなものだ。そしていつか消える……君がさっき独り言でつぶやいていたように。人間の場合、それは3年くらいらしいね。」

「終わらない恋はない、か。淋しいものですね。」

「そうかな？モノが消えた後には、灰が残るだろ？恋の後には、愛が残るのさ。」

end